卒業論文

尾張の浄土真宗大谷派僧侶による雅楽の伝承とコミュニティ

武田真於　愛知県立芸術大学音楽学部作曲専攻（音楽学コース）

要旨

日本の伝統音楽である雅楽は、音楽学者・僧侶・国文学者等によって様々な視点で研究が行われている。しかし雅楽伝承に関して、近代以降の状況や地方における伝承に関する研究は数が少ないという特徴がみられる。地方のうち尾張における近代以降の雅楽伝承に注目すると、僧侶や商人等の雅楽愛好家が伝承を支えていたことが明らかになっているが、僧侶の雅楽伝承に関する具体的な研究はほぼ見当たらない。そこで本論文では、近代以降の尾張で活動した浄土真宗大谷派（以下「大谷派」）僧侶の奏楽について明らかにすることを目的とする。

本論文は 3 章から構成される。

第 1 章では神社における雅楽の歴史を概観することで、尾張において古代から雅楽が行われていたことを示す。第 1 節では熱田神宮、第 2 節では真清田神社における雅楽の歴史を概観し、第 3 節では名古屋東照宮の雅楽伝承に注目する。名古屋東照宮の雅楽は明治維新の影響で断絶の危機に瀕したが、旧東照宮楽人や浄土真宗系僧侶の尽力により今日まで舞楽奉納が継承されている。

第 2 章では、第 1 章で登場した浄土真宗系僧侶に焦点を当てる。第 1 節では、浄土真宗における奏楽の歴史を概観する。浄土真宗では室町時代から儀礼の中に雅楽が用いられている。雅楽を用いる理由は先行研究でも複数考察されているが、特に本論文では門徒が目指す「極楽浄土」の荘厳を表現するためであるという点を指摘する。第 2 節では浄土真宗系僧侶や寺院に注目し、近世や近代の尾張で雅楽を演奏した僧侶や寺院を示す。尾張の浄土真宗系僧侶らは三方楽所楽人から「中間弟子」として重宝されていたという。なかでも楽僧（儀礼の中で奏楽を担当する大谷派僧侶）を多数輩出する羽塚家は大谷派本山である東本願寺においても奏楽を行っていたことを指摘する。第 3 節では法要の事例や尾張の楽僧の活動を取り上げることで、現代の尾張の楽僧の奏楽について示す。

現代の尾張の楽僧は、東本願寺や名古屋東照宮だけでなく名古屋別院の一部の法要で用いられる奏楽を担当しているほか、御遠忌法要や慶讃法要等の法要では舞楽も担当している。ここでは出仕する僧侶の動きに合わせて複数の雅楽の曲目が演奏されるという点や、現在東本願寺において楽僧らを取りまとめる役職には羽塚家出身以外の尾張の楽僧も任命されている点を述べる。

第 3 章では浄恩寺の法要に関する事例を取り上げることで、これまで先行研究等で触れられていなかった尾張の大谷派寺院の末寺における雅楽の導入方法について明らかにする。第 1 節では、現在浄恩寺の住職兼楽僧として活動を行う中島秀幸（以下「中島」）への聞き取り調査をもとに、浄恩寺の歴史や中島が行う「雅楽法要」について述べる。浄恩寺では、全ての年中行事において読経と龍笛による演奏が中島 1 名によって行われている。中島は法要に雅楽を用いる理由として、音楽を通して故人への想いを共有するという点だけでなく、他寺院との差別化のためという理由を挙げている。第 2 節では実際に筆者が参加した 2022 年と 2023 年の盂蘭盆会合同法要の分析から、浄恩寺の法要でどのように雅楽が用いられているのかを具体的に示す。法要で用いられる雅楽の曲目には年によって違いがみられるが、既存の雅楽の曲目の旋律を取り出して演奏を行なう点や僧侶の動きに合わせた曲目の変化がみられない点は 2 年とも共通している。このことから、浄恩寺の法要では龍笛の旋律そのものが持つ「荘厳性」を強調していると指摘する。

本論文では現代の尾張における大谷派僧侶の奏楽に関する事例を示すことで、尾張の大谷派僧侶が近代以降も尾張の雅楽伝承を支えていることが明らかとなったと言えよう。